

「生きる力」を伸ばす

校長 森 和 久

昔話です。今から20数年前、前の世紀の終わりごろ、病院内学級の担任を3年間務めておりました。中村日赤の小児医療センター内の一室を教室として、入院中で学校へ通えない児童に勉強を教えるのです。中村日赤は白血病の治療で先進的な病院だったので、当時は常時20人前後の児童が在籍しており、特別支援学級の学級編成ですので2学級扱いで3人の担任で指導しておりました。まさに北は北海道から南は沖縄までのお子さんが在籍されており、数か月から1年以上も入院される方がいました。

病院の中ですから、学校と同じようにできないことが多いです。また治療のため免疫力が弱っている児童が多いため、感染防止にも神経を使います。けれどもできないことを「できないからやらない」と考えるのではなく、「何ができるか」を考えて活動を工夫しました。そうすると、結構できることは多いです。

例えば「運動会」。会場はいつもの病棟内の教室です。学校(病院内学級は名古屋市立中村小学校の中の学級という扱いです)から、万国旗、赤白の旗等を消毒して持ち込み、それなりの雰囲気になります。競技種目で思い出せるものとしては「ツナ引き」。まぐろのツナ缶を、磁石を先につけたひもで、2人が両側から引き合います。うまく自分の側に引き寄せた方が勝ちです。磁石が缶から離れると一気に持って行かれるので、引く加減とタイミングが重要です。赤白対抗で競います。

「玉入れ」は本物の玉入れのかごと玉を持ってきて行いました。「やり投げ」は、雨の日に病院の玄関に置かれるビニルの傘袋を事前に獲得しておき、それを膨らませて投げます。遠くに飛ばした方が勝ちです。他にもいろいろな競技を行いました。ほとんど「親父ギャグ」のような競技もあるのですが、保護者も入院

中の幼児も参加して盛り上がりました。

他にも「学校探検」の代わりに病院に全面協力いただき「病院探検」をして、検査室や院長室を回ったり、「調理実習」としてたこ焼きパーティーをしたり、学芸会や音楽発表会をしたり、本当にいろいろなことをしました。

代替の、親父ギャグのような、ささいなことでも楽しむことができるのは、想像力であり、自分の物語をつくり力であり、「生きる力」です。病院内学級での「生きる力」は、文字通り、リアルに「生きる力」です。「こんなのつままない」と思うのではなく、ささやかなことにでも生きる喜びが感じられる、できない日々できていることを見いだせる、学びたいと思う、より広い世界に想像をめぐらすことができる。そういうお子さんは、結果として「生きる力」が強いということ、3年間勤める中で実感してきました。

このような昔話を思い出したのは、今まさに新型コロナウイルス感染症対策のためできないことが多い状況で、ある意味似ていると感じたからです。何ができるかを考え、想像力をめぐらせれば、できることは多いと思いますし、楽しいことは多いと思います。そして、このような状況の中で、楽しく過ごそうとすることで、自らの「生きる力」を伸ばすことができるのではないかと考えています。

さて、7月の生活指導の目標は、「相手のことも考えよう」です。まず自分のことを考え、その上で相手のことも考える。自他を大切にする考え方です。まさに今の状況において重要な視点になると思います。いろいろな場での、いろいろな状況で子どもたちに考えさせたいと思います。

